

Communication-Globalization-Collaboration: Going beyond traditional approaches in language education toward active learning

武上富美 (熊本県立大学)

世界は急速にグローバル化が進み、今までにない早いペースで国境を越えて文化や情報の共有を行っている。そのような現代社会において言語はコミュニケーションツールとしてあるいは媒体として主要な役割を果たしているが、グローバル社会で通用する英語運用能力は、英語の文法習得や語彙習得のみでは育成されない。言語学習者自身が “言語を通じて他者の文化や思想や習慣の相互理解を行う社会的存在である” ということを認識し、言語を媒体としたコミュニケーション能力を高める自律した学習者となる必要がある。言語研究の分野では言語学習は“*linguaging*”、つまり言語学習の過程 (プロセス) でもあると考えられており、外国語習得過程を重視している。継続的な学習とその学習過程において学習者は言語知識と経験を相互的に補完していき、異文化理解やグローバルな視野をもつ人材へと成長するだろう。

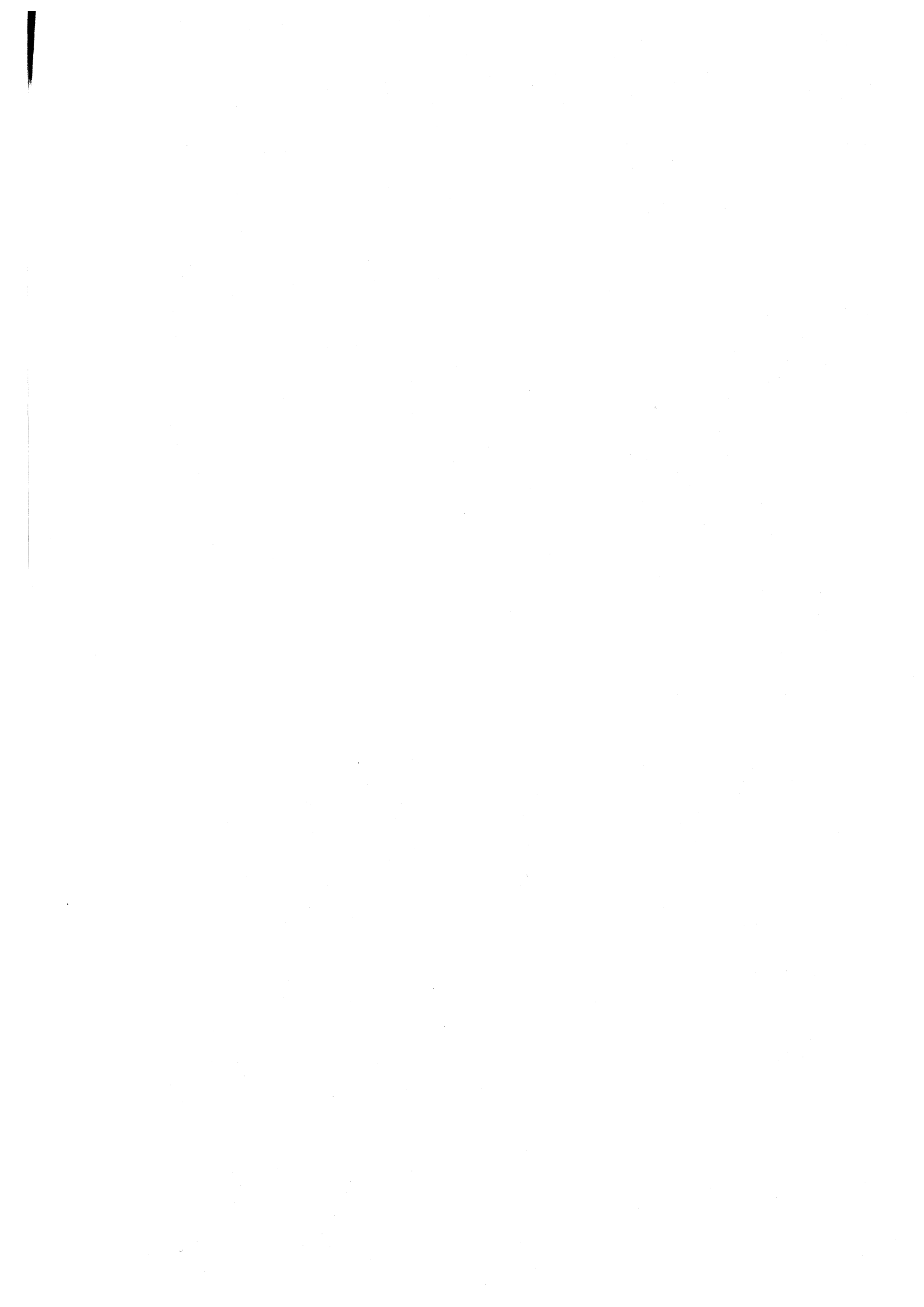
以上のことを鑑みて本講演では日本の社会的背景と英語教育改革とそれに伴う求められる指導法の変化とその実際について研究例を挙げながら触れた上で、注目を集めているヨーロッパ参照枠 (*Common European Framework of Reference for Languages: Learning, teaching, assessment*) と欧州評議会による複言語主義の理念、またそれらを日本の英語教育に取り入れる意義について考察する。また、言語学習の枠組みとしての *CLIL* (言語と内容統合型学習) とアプローチとしての協働学習を学習理論と紐付けされる指導法から考察し、*CLIL* の 4C (*Content · Cognition · Communication · Community or Culture*) を取り入れた教育実践を述べる。”

Communication-Globalization-Collaboration: Going beyond traditional approaches in language education toward active learning

Fumi Takegami (Prefectural University of Kumamoto)

Globalization is spreading in the world and culture and information are being shared over national borders. Languages have a vital role in human communication. We cannot build language proficiency just by learning grammar and vocabulary. Learners, as citizens of the world, need to be aware of the importance of understanding other cultures, ideas, and customs. They need to be autonomous learners to build their proficiency. Learning a language is described as “*linguaging*,” which emphasizes the processes entailed in language learning. Learners will grow to be world citizens with cross-cultural understanding by learning and experiencing languages.

In this presentation, referring to the social context of the changes that are taking place, I will examine English education reforms in Japan, showing how teaching methods have changed. I will also introduce the “*Common European Framework of Reference for Languages: Learning, teaching, assessment*” and the plurilingualism policies of the Council of Europe, and assess the significance of implementing CEFR in Japan. Finally, I will describe a teaching approach involving Content and Language Integrated Learning (*CLIL*), implementing the 4Cs (*Content · Cognition · Communication · Community or Culture*) within a cooperative learning framework.



Communication-Globalization-Collaboration: Going beyond traditional approaches in language education toward active learning

武上富美 (熊本県立大学)

1. はじめに

日本は今年、「令和」という新しい時代を迎えた。テクノロジー技術の発達によって、かつてないほどの速さで世界の情報が供給され、さらにそのスピードは落ちる気配はなく地球のどこにいても私たちは繋がるようになった。このように急速に進む国際社会において、コミュニケーションを支える媒体としての英語は「実利実用性が高い言語」(宮崎, 2014)であることは誰もが認めるところであり、コミュニケーションを支える言語である英語を教える英語科教育においては、様々な指導方法論が多く議論されている。そこで日本の英語教育改革とそれに伴う指導法の概要を述べ、次に世界共通語としての英語と現在注目を集めているヨーロッパ参照枠(Common European Framework of Reference for Languages: Learning, teaching, assessment)と言語学習の枠組みとしてのCLIL(言語と内容統合型学習)を学習理論と紐付けされる指導法から考察し、CLILの4C(Content・Cognition・Communication・Community or Culture)を取り入れた教育実践への取り組みを考察する。

2. 学習指導要領の変遷

日本の公教育における英語カリキュラムは文部科学省が編成する学習指導要領によるものであり、昭和22年(1947年)の制定以来、社会のニーズの変化や教育に関する理論や指導法の変化や発展に伴いおよそ10年ごとに改定が繰り返されてきた。基本的に「読むこと」「書くこと」「聞くこと」「話すこと」を言語活動の目標に定められてきたが、平成元年(1989年)に中学・高校ともに「コミュニケーションを図ろうとする能力の育成」という内容が組み込まれ、大きな転換期を迎えることになった。以後、平成における30年間は「コミュニケーション能力の向上を図る」ことに於いて多くの議論がなされ、アクションプランなどの様々な取り組みや指導要領の改定が行われた。平成23年度から小学校外国語活動が導入され、令和2年より正式な教科となる。中学校と高等学校においては平成21年から基本的に「英語の授業は英語で行う」方針により、令和2年(2020年)にはその体勢が確立することになる。学習指導要領の総説には「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善(アクティブ・ラーニングの視点に立った授業改善)を推進することが求められる」と明記され、授業の改善が求められている。また学習指導要領総説の外国語科改定の趣旨と要点においては、国際的な基準CEFR(Common European Framework of Reference for Languages: Learning, teaching, assessment 外国語の学習・教授・評価のためのヨーロッパ共通参照枠)の到達目標を参考にして、日本の外国語教育目標を以下のように示している。

「知識及び技能」と「思考力, 判断力, 表現力等」を一体的に育成するとともに、その過程を通して、「学びに向かう力, 人間性等」に示す資質・能力を育成し、小・中・高等学校で一貫した目標を実現するため、そこに至る段階を示すものとして国際的な基準であるCEFRを参考に、「聞くこと」, 「読むこと」, 「話すこと[やり取り]」, 「話すこと[発表]」, 「書くこと」の五つの領域で英語の目標を設定している。(第1章総説2. 外国語科改定の趣旨と要点より抜粋)

また、CEFR については以下のような補足記述がある。

CEFR では、人間が言語を用いて行うタスク(CEFR では 人間の行為全般をいう)は reception(受容), interaction(やり取り), production(産出)の3領域に分かれており、それらが総合的に「コミュニケーション活動(Communicative Activities)」と呼ばれている。CEFR で示されている5つのタスク内容は communicative competence(コミュニケーション能力)を示しており, linguistic competence(従来の語彙・文法などの知識と技能), sociolinguistic competence(社会的文脈などを考慮してことばを使える力), pragmatic competence(場面・状況・相手などを考慮してことばを使える力)と定義されている。

このようにコミュニケーション能力の向上に向けて聞くこと・読むこと・話すこと(やりとり)・話すこと(発表)・書くこと・を軸にして英語科教育の到達目標はある程度明らかになっている。ではここでコミュニケーション能力とは何を指すのか、コミュニケーション能力と英語科指導について述べる。

3. コミュニケーション能力 (Communicative competence) とは

Communicative competence (コミュニケーション能力) とは1970年代にHymes(1972)が提案した概念である。Hymesによるとコミュニケーション能力とは言語そのものに関する知識だけでなく、言語を運用する能力、対人関係の中で交渉したりする能力のことである。さらにSavignon(1983)は話し言葉だけでなく、書き言葉においても場面に適切な表現を取捨選択し使用する能力であるとした。Canale & Swain(1980)はcommunicative competence (コミュニケーション能力) の構成要因は文法能力・談話能力・社会言語能力・方略能力の4つであるとし、Cerlce-Murcia(2007)は社会文化的能力・談話能力・言語能力・定型表現能力・対話能力・方略的能力の6つの構成要因がコミュニケーションを支える構成要因であるとし、詳細に示している。これらの構成要因はCEFR の, linguistic competence (言語能力)、sociolinguistic competence (社会言語能力)、pragmatic competence (実践能力) の到達に共通性を見出せる。

4. コミュニケーション能力を養う英語科指導を巡って

日本の外国語学習は1800年代のオランダ語習得に遡り、文法を意識的に理解し読解することが重視された。生徒と教師のやりとりは母語で行われ、現在でも高等学校や中学校で英語—日本語の文法訳読式は取り入れられていると思われる。

その後行動主義に基づくアプローチとして直接法 (Direct Method) が現れた。日本ではイギリスから言語学者・教育者であるパーマー(Palmer)が大正後期から昭和の初めまで日本に滞在し、日本人を対象にオーラルメソッド(The Oral Method)を開発した。音声から始める oral introduction, 繰り返しと状況に合わせて使うことが重視された。アメリカでは1940年~50年代にミシガン大学でオーディオリンガル法 (The Audio-Lingual Methods) が開発され、ドリルや繰り返し, mimicry-memorization, パターン・プラクティスや会話と置き換えドリルに重点が置かれたが、これらはオーラルメソッドに類似している。また、1970年代のTotal Physical Response(全身反応)も行動主義に基づくアプローチである。

その後、言語学者であるチョムスキーによる行動主義への批判により、コミュニティカティブアプローチが現れた。これは社会構造主義に基づき学習者の知識の発達は他者との相互作用によって構築され

るという理論に基づいていると考えられる。以下は、Nunan(1991)や Doughty and Long (2003) による CLT の概要をまとめたものである。

CLT Approach:

- Using authentic text or real objects from real life are used.
- Enhancing the learner's personal experiences as important contributing elements to classroom learning.
- Providing opportunities for learners to focus not only on language, but also on the learning process itself [e.g.: not only structures, but also strategies to complete tasks].
- Promote learning by doing.
- Promote cooperative and collaborative learning. (adapted from Nunan,1991)
- Use tasks as an organizational principle. (Doughty and Long,2003)

日本では1989年に初めて文部科学省が「コミュニケーションを図ろうとする能力の育成」を目標に定めた。理想は学習者に言語使用を促進するようなタスクを与え言語活動を行うコミュニケーション型言語指導法である Communicative Language Teaching (CLT) が取り入れられ、教師中心の指導から、学習者主体となる指導方法への移行であったが、CLT が理念や指導における特徴の包括的アプローチを示していたために、学習者中心の指導への移行は容易くはなかったと思われる。また教師中心の指導に教師及び学習者が慣れており、尚且つ正確さを追求する文法訳読式と口頭による反復練習で音声から言語を学ぶオーラルメソッドは指導方法の明確さから広く日本の英語科指導に用いられてきたのではないかと推測される。

5. どのような英語を誰が教えるのか

世界では10億から20億人が英語を使っていると言われ、習得方法の違いや使用方法の違いで大きく3つに分けられることが多い。

1. 母語としての英語 (ENL: English as a Native Language)
2. 第二言語としての英語 (ESL: English as a second language)
3. 外国語としての英語 (EFL: English as a Foreign Language)

なお、日本で学ぶ英語はEFLとなる。

また英語を多極的に捉えるなら Kachru のモデル (1992, 1995) は、3つの円で表されている。

1. 内円圏 (Inner Circle: 英語を母語とする国々: 米・英・カナダ・オーストラリア・など3.2~3.5億人)
2. 外円圏 (Outer Circle: 英語を公用語にしている国々: インド・パキスタン・フィリピン、ガーナなど3~5億人)
3. 拡大円圏 (Expanding Circle: 英語は日常語ではなく学校で教科として教えている国々: 日本、中国、ロシア、韓国、インドネシアなど5~10億人)

これを見ると内円圏の人口に比べ外円圏と拡大円圏の総数の方が圧倒的に多いのがわかる。Kachru はこれ

ら3つの円に属す英語を “World Englishes” と呼び、英語母語話者の英語である必要はなくそれぞれの英語で良いのではないかと提唱している。一方、Smith(1983)は英語を学ぶというのは母語話者になることが目標ではなく、英語が媒体となり必要な場面において自己表現することであると述べている。

It is clear that in these situations there is no attempt for the user to be like a native speaker of English, English is used to express the speaker’s business policy, government position, or political conviction.

(Larry E. Smith, 1983, 7-8)

言語（英語）は相互理解を支えるものであり、言語を通じて相手と自己を理解し、文化の違いに対する理解もコミュニケーションであるといえる。拡大円圏に属し、EFL 環境である日本においては、その独特の文化を長い歴史の中で築き上げてきた自国を敬いつつも、グローバルな視野を持ち世界の人々とコミュニケーションを図る中でお互いに豊かになることではなかろうか。今後の英語科教育においては、“英語が理解できる”だけでなく、それを用いて豊かな社会を築いていくことを可能にする人材育成のために媒体としての英語を教える教師の人材育成は今後の大きな課題である。

6. CLIL とは

CLIL は欧州のヨーロッパ言語共通参照枠(Common European Framework of Reference for Language)の理念のもと、内容と言語を統合する学習法として生まれた。ヨーロッパでは、言語の多様性と文化の豊かさが相互理解を生む共通の資源であるにとらえ、現代語をよりよく知ることによって母語の異なるヨーロッパ市民間のコミュニケーション、相互理解、移動を促進し、これまで以上にヨーロッパレベルでの協調の実現を目指すという理念がある。(CEFR 日本語版 p. 2「1.2. Council of Europe の言語政策のねらいと目標」参照。)

これらの理念のもと CLIL は言語学習と内容を統合する学習の方向性を4つのCを示すことで示している。CLILにおける4つのCはContent(トピックや教科科目)、Communication(言語知識やスキル)、Cognition(批判的・論理的思考力)、Culture(異文化理解と Global Citizenship)の4つの要素でそれらを相互的に取り入れる。表1はCLILの4つのCとその内容を示したものである。

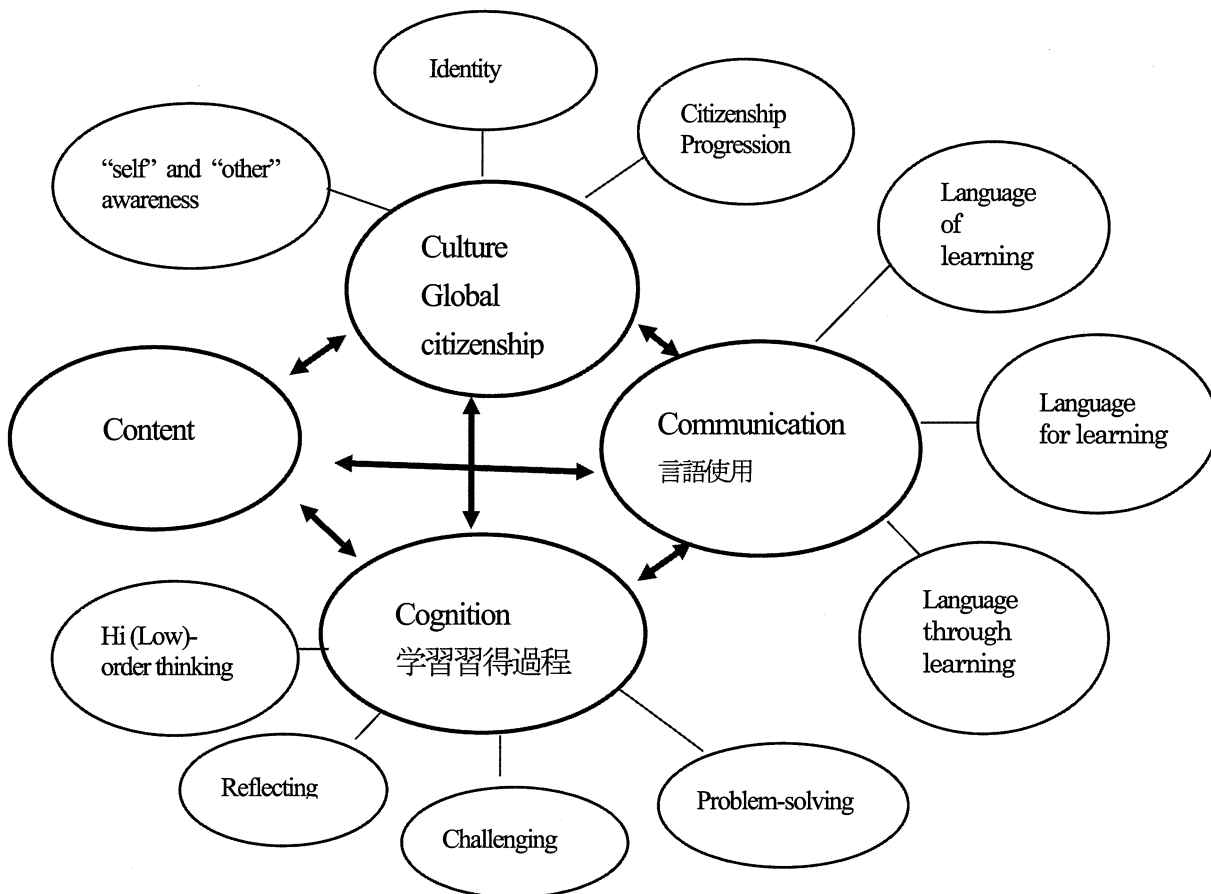
(表1) CLIL : 4Cs とその内容

CLIL の4Cs	内容
Content (内容)	教科内容・政治・文化・文学・科学・教育・時事問題や社会問題など
Communication (言語)	-Language of learning (語彙・文法・語法/表現・成句など) -Language for learning (書く・話す・議論する・プロジェクトを作るなど) -Language through learning (フィードバック・プレゼンテーションスキル・ディスカッション・賛成や反対意見など)
Cognition(学習習得過程と認知)	-Problem-solving (問題解決), Challenging (やりがいのある), Reflecting (内省・評価) -High-order thinking skills(高次思考力)である分析・評価・創造を伴うタスク:

	-Low-order-thinking Skills (低次思考力) である記憶・理解・応用 (適用) のタスク
Culture (異文化理解と Global Citizenship)	-“self” and “other” awareness (自己と他への気づき) -Citizenship Progression -Identity (自我・アイデンティティ)

これらの4つのCは図1が示すように相互的に関係するものであり、ColeらはCLILは内容と言語学習が統合融合し、その学習過程の重要性を指摘している。

“an approach which is neither language learning nor subject learning, but an amalgam of both and linked to the process of convergence”. (Coyle, Hood & Marsh, 2010, p.4)



(図1) 4Cの相互関係 (Coyle, Hood & Marsh (2010)を参考に作成)

まず、Content(内容)とは、授業で学習者が学ぶ知識、スキル、理解 (池田, 2102, p. 5)、或いは時事問題や社会問題などであるが、学習者は知識やスキルのみを鍛えるのではない。与えられたタスクを達成する過程を通してContent(内容)や教科 (Subject matter) に対する理解を深め、学習過程を通して知識を積み重ねる中でスキルの向上を目指すものである。

Subject matter is not only about acquiring knowledge and skills, it is about the learner constructing his/her own knowledge and developing skills (Lantolf, 2000; Vygotsky, 1978).

次に Communication は目標言語の4技能を使い、語彙・文法・語法・表現・成句などの言語、書く・話す・議論する・プロジェクトを作るといった学びのための言語、プレゼンテーション・ディスカッション・賛成や反対意見などを述べることを通しての言語の3つのバランスを保ちコミュニケーション支える言語活動を図るとしている。これらの言語活動を支える指導法として CLT (communicative language teaching) に親和性があると思われる。

Cognition (認知)については学習過程を重視し、やりがいのある問題とその解決に向けて、さらに内省・評価を促すタスクを行う。このタスクに指導者が低次から高次のスキルを埋め込んで授業をデザインする。アメリカの教育心理学者ベンジャミン・ブルーム (Benjamin Bloom) は6段階に認知領域を分類し High-order thinking skills (高次思考力) と Low-order-thinking Skills (低次思考力) を示し、低次思考力では Remembering (記憶)・Understanding (理解)・Applying (応用), 高次思考力では Analyzing (分析)・Evaluating (評価)・Creative (創造) の順により深い学習となるとしている。このような学習活動を支えるには協同学習の理念を取り入れ、生徒・学生の思考力や発達段階に応じたタスクを行うことが有効であろう。

協同学習 (Cooperative Learning) については以下の内容が挙げられる。

-Positive interdependence.

-Responsibility fully participate and put effort within their group:

Each member has a task or role.

-Face-to-face promotive interaction:

Members promote each other's success. Students explain to one another.

-Individual and group accountability.

-Interpersonal and social skills. Skills include effective communication, interpersonal and group skills such as:

1) Leadership, 2) Decision-making, 3) Trust-building, 4) Communication, 5) Conflict-management skills

-Group formation or group processing:

Every so often groups must assess their effectiveness and decide how it can be improved.

(adapted by Brown & Ciuffetelli 2009, Johnson & Johnson 1994, Siltala 2010)

学校教育という Context (背景) においてと Communication (言語使用) と Cognition (学習習得過程) における教育学的理念及び学習理論を Content (内容や教科) に相互的に組み合わせ、Culture (文化) や地球市民としての自己や他への気づきや異文化間の認識を生徒・学生が深められるような授業を実践するためには、十分な計画が必要であろう。また、CLIL の枠組みは従来の受け身的な授業形態から生徒・学生が積極的に学習に参加できる環境、アクティブ・ラーニング環境を確実にもたらすであろう。言語研究の分野では、言語学習は “Languaging” (Swain, 1985) として、外国語習得過程、つまり言語学習の認知の過程 (プロセス) を重視している。CLIL の枠組みは、学習過程において学習者が言語知識と経験を相互的に補完していく過程をどのように支えていくかに於いて、言語学習を支える指導を計画する際に有効だと思われる。

7. 教育的示唆と英語教師育成への展望

2020年度から日本では小学校での英語科学習が教科となることによって、小学校・中学校・高等学校・大学での英語科教育が一連となる。現行の指導要領によると、小学校では音声を中心としたゲームなどの活動、中学校では会話中心、高校ではディベートやプレゼンテーションなどの活動も取り入れるように示唆されている。成長発達段階に応じた認知レベルと Context（背景）を考慮すれば CLIL を小学校英語教育から高等教育現場の外国語指導に至るまで、長期にわたり適用範囲は広く活用することも可能になるであろう。なお、CLIL はその計画段階において教師自身の指導における内省や専門分野の指導に対して再認識を促すという面において、教師自身もまたアクティブになりうるであろう。

また、今後、英語教師を目指す学生は、教師によるインプットは生徒同士または生徒と教師のインタラクションを通して生徒のアウトプットを最大限に引き出す最もオーセンティックで有意で豊かなものであることを認識し、言語学習者が“言語を通じて他者の文化や思想や習慣の相互理解を行う社会的存在”となれるように、新しい時代の英語教育を切り開いていくよう願う。

（参考文献）

- Brown, H., & Ciuffetelli, D. C. (Eds.). (2009). *Foundational methods: Understanding teaching and learning*. Toronto, Canada: Pearson Education.
- Canal, M & Swain, M (1980). Theoretical bases of communicative approaches to second language and testing. *Applied Linguistics*, (1), 1-47
- Celce-Murcia, M. (2007). Rethinking the Role of Communicative Competence in Language Teaching. *Intercultural Language Use and Language Learning*, 41-57
- Coyle, D., Hood, P., Marsh, D., (2010) . *CLIL: Content and language integrated learning*. Cambridge University Press, Cambridge.
- Doughty, C. J., & Long, M. H. (2003). Optimal psycholinguistic environments for distance foreign language learning. *Language Learning & Technology*, (7) , 50-80
- 池田真(2012). 「第 1 章 CLIL の基本原理」, 「第 2 章 CLIL のシラバスと教材」池田真, 和泉伸一, 渡部良典 (2012) 『. CLIL(内容言語統合型学習)上智大学外国語教育の新たなる挑戦 第 1 巻 原理と方法』(1-29). 上智大学出版
- 外国語活動・外国語編：文部科学省
[www.mext.go.jp > micro_detail > _icsFiles > afieldfile > 2019/03/18](http://www.mext.go.jp/micro_detail/_icsFiles/afieldfile/2019/03/18)
- 【外国語編】中学校学習指導要領 - 文部科学省
[www.mext.go.jp > micro_detail > _icsFiles > afieldfile > 2019/03/18](http://www.mext.go.jp/micro_detail/_icsFiles/afieldfile/2019/03/18)
- 【外国語編 英語編】高等学校学習指導要領（平成 30 ... - 文部科学省）
[www.mext.go.jp > micro_detail > _icsFiles > afieldfile > 2019/03/28](http://www.mext.go.jp/micro_detail/_icsFiles/afieldfile/2019/03/28)

- Johnson, R. T., & Johnson, D. W. (1994). An overview of cooperative learning. In J. Thousand, A. Villa, & A. Nevin (Eds.), *Creativity and collaborative learning*. Baltimore, MD: Brookes Press.
- Kachru, B. B.(Ed.) (1992).*The other tongue: English across cultures*. Urbana, IL: University of Illinois Press. 2nd revised edition.
- Lantolf, J. P. (Ed.). (2000). *Sociocultural theory and second language learning*. NY: Oxford University Press.
- 宮崎 幸子 (2014) 国際化グローバル化社会における日本の外国語教育についての考察 『日本英語英文学』 第24号45-71
- Nunan, D. (1991). Communicative tasks and the language curriculum. *TESOL Quarterly*, 25(2), pp279-295.
- Savignon, S. (1983). *Communicative competence: Theory and classroom practice*. reading, MA: Addyson-Wesley.
- Siltala, R. (2010). *Innovativity and cooperative learning in business life and teaching*. Turko, Finland: University of Turku.
- Smith, Lary, E.(1983).English as an International Language: No Room for Linguistic Chauvinism. In Lary E. Smith,ed., *Readings in English as an International Language*. oxford: Pergamon.
- Swain, M. (1985) “Communicative competence: some roles of comprehensible input and comprehensible output in its development”. In Susan M. Gass and Carolyn G. Madden, eds. *Input in second language acquisition*, 235–253. Rowley, MA: Newbury House.
- Vygotsky, L. S. (1978). *Mind in society: The development of higher psychological processes*. (M., Cole, V. John-Steiner, S. Scribner, & E. Souberman, Eds.), MA: Harvard University Press.